

令和6年度 学校自己評価システムシート (さいたま市立 海老沼 小学校)

学校番号 077

【様式】

目指す学校像	○学ぶよこびのある学校 ○家庭や地域と連携した教育活動を行う、信頼された学校	○人との関わり合いを大切に、地域とともに歩む学校 ○安心・安全で美しい学校
--------	---	--

重点目標	1 魅力ある学習指導の工夫改善・充実と健康教育の推進 2 豊かな心を育む教育の推進(生徒指導・教育相談の充実) 安全・安心で美しい教育環境の整備 3 地域・保護者と共に歩む学校づくりの実現 4 働き方改革と教職員としての資質向上の推進
------	--

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。  
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学校自己評価							学校運営協議会による評価	
年度目標			年度評価				実施日令和7年2月13日	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	○学校評価アンケートの「授業に進んで取り組んでいる」に肯定的に回答した児童が88%である。また、市学調の読書習慣に関するアンケートでは高学年に向かうにつれて市平均を下回る結果となった。 ○普段の学習の様子では、タブレットを活用した学習に興味を示す児童が多く、活用状況のアンケートは市平均を上回っている。(昨年度は下回っていた) ○体力テストは、全体的に前年度より上回っている。(特に、20mシャトルラン、立ち幅跳び) ●全国学力状況調査・市学調査では、国語、算数とも市平均と比べ下回る結果であるが、少しずつ市上昇傾向にある。 ●学びに向かう力が低い傾向にある。 ●体力テストは長座体前屈の結果が市平均を全学年下回っている。	・教師が授業改善や授業力向上を図ることで、子どもたちの学力向上を図る。 ・体育の授業や海老沼タイムを活用し、子どもたちの体力向上を目指す。	①授業研究(学校課題研究→個別最適な学び)を進めていく中で、1人1回研究授業や公開授業を実施し、指導事例として共有する。 ②ICTの活用することで、興味をもって繰り返しの学習を行い基礎基本事項の定着ができるようにする。 ③読書タイムや図書館イベント等により読書の習慣化、生活化を図る。学校図書館の開放(長期休業中)計画・実施する。	①学校自己評価アンケートに係る教職員アンケートにより、教育課程の項目において肯定的な回答をする教員が昨年度同等となったか。 ②国語、算数について、市学調において令和5年度より向上したか。 ③学校図書館の貸出冊数を昨年度比5%増加したか。	学校課題研究「学ぶ楽しさを感じ、生き生きと学ぶ児童の育成」1年目。自分が研究したい教科を選択し、少人数グループでの研究を進めている。教職員アンケートによると教育課程の項目においてほぼ全員が肯定的な回答をしている。 市学調においては令和5年度と同等であった。 学校図書館の貸出冊数は12月末昨年度比14%増加した。夏季休業中に2日間図書館を開放した際は、未就学児を連れて保護者が来館していた。読書タイムでは全担任が読み聞かせを行った。また、図書館の児童によるビブリオバトル等新しい活動も行われた。	B	教職員、児童とも取組に対しての評価は肯定的であり、満足感があるようだが、相応した学力向上が見られなかった。しかし、児童の取組に対する姿勢は前向きな回答が多い。来年度以降の研究に生かす。また、読書活動に関しては、イベントがある時には児童の貸出冊数が伸びている。来年度も引き続き取り組んでいく。長期休業中の図書館開放もう少しは日数を増やしていきたい。	・子どもたちが学校に楽しく来ているのが何より素晴らしい。学力に関しては、先生方の取組が成果につながることを期待したい。 ・体力面の成果が上がっているのが素晴らしい。シャトルラン(持久力)50m走(瞬発力)ともに市平均を上回っているのは、業前活動等の取組が生きているのではないと思う。 ・心肺蘇生を小学生からしっかりと行っていることで、市内にAEDを設置している効果が上がる。今後も計画的な指導を進めていくことを期待したい。
2	○「ルールを守る」「安全に気を付ける」について肯定的に回答した児童は97%96%と高い割合になっている。市学調のアンケートでも同様である。 ○児童一人ひとりの状況を的確に把握し、組織的に支援・相談ができています。教職員アンケートでも肯定的な結果である。 ●朝、教室に入れない、体調不良で登校できない等、児童が抱える困難さがより複雑化している。 ●教職員による安全点検を確実に行うだけでなく、昨年度に引き続き児童が自ら危機を予測したり、回避したりする力を育くむことが課題である。	・児童の心に寄り添った積極的かつ丁寧な教育相談及び生徒指導を組織的に展開する。 ・安全安心な「学びの場」としての施設・設備、環境の整備と自己防衛力の育成。	①初期対応を確実にし、きめ細かい児童理解を組織的に進める。可能性、個性、変化、変容を認める。 ②家庭や関連機関との連携やSC・SSWの活用し、児童理解に努める。 ③道徳の授業の充実、体験活動の場や機会の充実を図る。	①学校自己評価に係る児童アンケートにおいて、「学校が楽しい」の肯定的な評価が昨年度同等であったか。 ②学校自己評価に係る教職員アンケートにおいて、生徒指導、教育相談の5項目の肯定的な評価が昨年度同等であったか。	生徒指導・教育相談主任を中心に組織的に子どもたちの諸問題の解決に向けた取組を推進した。新たな登校渋りの児童には、早急に保護者と連携をとり、関連機関へつなぐ。児童アンケートでは項目を集約してしまいがたが昨年度と同等であった。また、教職員アンケートにおいては昨年度と同様な結果となり、全職員が肯定的な回答であった。	A	S o l a 一むに出来る児童は、それぞれ登校パターンや対応の仕方が異なる。運用については個対応をすることが求められている。担任の負担にならないよう、手立ても併せて検討していく。「児童のトラブル」に関してのアンケート項目で児童の肯定的な回答が増えた半面、保護者は否定的な回答が増えた。これまで以上にアンテナを高くして児童を見ていきたい。	・不登校児童が多くなっているのは、この学校に限ったことではない。一人一人に合った対応を進めていってほしい。 ・「悩んだときに先生は助けてくれますか」に対し、99%の子どもたちが肯定的な回答をしている。これは、海老沼小学校のどこに出しても誇れる部分としてよいと思う。 ・放課後の過ごし方(公園等地域の施設の使用方)については、引き続き学校での指導をお願いするとともに、家庭への啓発も進めていく必要がある。学校、家庭、地域の三者で子どもを育てていく意識をここから発信していく。
3	○学校運営協議会は、年3回協議会を実施し、児童会の児童との意見交換を行った。 ○HPをリニューアルし、学校の様子をブログで公開した。(月4回以上) ●学校運営協議会での議論を家庭・地域にどのように広めていくかが課題である。 ●地域行事、学校行事等の円滑な実施。	・学校運営協議会を中心に、地域保護者とともに歩む学校を目指す。 ・学校や地域の行事を通じて共に成長する機会の拡充。	①地域連携コーディネーターが中心となりスクールコミュニティによる地域・保護者との連携・協働の充実を図る。 ②学校HP内の学校運営協議会の情報発信するページを更新し、取組について情報共有できるようにする。	①年に3回の学校運営協議会で、目指す児童の姿勢を共有できた。と回答する割合が90%以上となったか。 ②HP内にコミュニティスクールのサイトの更新を3回以上実施できたか。	学校HP内に学校運営協議会のサイトを新設し、取組について情報共有した。また、今年度は児童会の役員の児童に会に参加してもらい意見をもらった。学校の様子を月に4回以上ブログで発信した。スポーツフェスティバル、ふるさと発見子ども祭り(中止)、えびっくランド等の地域行事に職員も参加した。合唱部は老人ホームに加えて、地域のイベントにも出演した。教職員アンケート・保護者アンケートとも概ね昨年度同様の回答だった。	A	来年度も学校の様子を様々な形で発信していく。特に、ホームページ更新は今後も計画的に実施していく。年間を通して地域の行事に先生方が参加することで、地域の方々から会が盛り上がったとの声をいただいた。来年も同様に参加していきたい。保育園、幼稚園との交流は来年度以降実施予定。今年度中に立案する。	・校長のリーダーシップが発揮され、多くの教職員が地域との交流に参加してくれているのが素晴らしい。地域の運動会では、若い先生が活躍する姿が見られ、地域とともに歩む学校が具現化されていた。 ・幼稚園、保育園との交流行事をコロナ前のように行っていくとよいのではないかと。できるところから連携して地域の子どもの育てていってほしい。
4	○学校課題研究と平行してICTの活用方法について、エバンジェリストが中心となり研修を行ってきた。 ○データの利活用等ICT活用により、業務改善がなされ在校時間が減少している。 ○研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励をすることで、教職員がライフステージに応じた研修を意欲的に進めている。 ●ICTの活用について教職員での取組の差が見られる。 ●自分が担当した教科やクラスの状態について情報を共有したりすることが課題である。	・教職員の心身の健康に留意し、働き方改革を念頭におき互いを支え合いながら、生き生きと働ける職場環境を整える。	①ICTの活用方法の研修を、3か月に1回以上実施する。(スクールダッシュボードの活用を中心に) ②学年会を週に1回設定することで、情報共有の機会を確保する。 ③教職員の心身の健康に留意し、働き方改革を念頭におき、互いを支え合いながら、生き生きと働ける職場環境を整える。	①全ての教員が日常的にICTを活用する状況になったか。 ②学校自己評価アンケートに係る教職員アンケートにより、働き方に関する3項目の肯定的な評価が昨年度より向上となったか。 ③ストレスチェックの結果が昨年度同程度であったか。	全教員がICTを活用した公開授業を行い評価しあったり、校内研修を学期毎に行うことで指導力向上につながることができた。働き方に関するアンケートは昨年度と同程度だったが在籍時間(12月末)は昨年度より15%減っている。教材研究日を確認したこと、情報共有や教材の検討をする機会が増えた。ストレスチェックの結果から学校全体の健康リスクが5p下がった。	A	業務内容にかかる時間が短縮されてきた。今年度から導入されたスマートダッシュボードの活用を工夫することでさらに時間削減ができると考える。しかし、会議内容によっては、30分で終わらないことも多かった。来年度は、会議や教材研究の時間確保のため、日課表を変える予定である。	・スクールロイヤー研修をはじめとする教職員研修が充実していた。新しい知識を学ぶ機会をこれからもたくさんもってほしい。 ・データにも表れているが、働く先生方が生き生きとしているのが見て取れる。校長の経営がうまくいっている証左である。

